

## 『資本論』第1部刊行100年にあたっての評価

— ドイツ, ソヴェト, 英米 —

### まえがき

1967年はマルクス『資本論』第1部<sup>1)</sup>初版刊行100年、レーニン『帝国主義論』<sup>2)</sup>刊行50年、および10月社会主義革命50年にあたり、またつづく1968年はマルクス生誕150年、マルクス=エンゲルス『共産党宣言』刊行120年、および1848/49年ブルジョア革命の120年にあたる。これらを記念して世界各国で盛大な記念行事がくりひろげられた。

その国際的な規模の様子は2つの書目[1][5]によってうかがうことができる。[1]は日本およびソ連・東独・その他での、『資本論』100年、『帝国主義論』50年、ロシア10月革命に関する記念論文(1968年2月まで)をふくみ、[5]は各国の『資本論』100年記念著書15点、論文169編(1967年中に刊行のもの)をあげている。もちろん直接記念と明示しなくとも、マルクス=エンゲルス=レーニンに関する研究は、その他に多数あることはいうまでもない。かれらおよび10月革命の巨大な遺産と影響を知ることができる。

本調査の目的は、『資本論』100年の記念にさいして、各国の記念行事の中で、『資本論』が現在どのように受けとられ評価され、どこにその意義を求められているかを明らかにしようとするところにある。上記2書目をみても知られるように、その規模はあまりに大きいし、現在(1968年7月)なお進行中である。そこで本調査では、包括的ではなく、さしあたり、地域を東西ドイツ・ソ連・米英に限り、1968年7月までに入手しうる資料によることとした。

しかしながら対象とした各国についても、とりあげられている内容は当然広範多岐にわたっている。そこで本調査では、経済学を中心とし、現在マルクス主義経済学

の直面している諸問題に関連して、われわれにとって興味深い論点を取りあげることとした。そして問題の焦点などは各国の担当者がそれぞれ独自に選択し紹介論評し、編集にあたり形式の統一をはかった。しかしそれによって各国の記念事業の概要は知りうるし、また各国を対比してみると、そこにおのずから、現時点での『資本論』の評価の様相を見ることができると同時にマルクス主義経済学の現状を表現することにもなっているわけである。

われわれの調査対象は以上のように限られている。西欧・東欧・アジア・アフリカ・ラテン=アメリカなどのその他の国々、および対象とした各国についても、なお多くの記念事業がある。それらについては、前掲の書目[1][5]あるいは、国際学術会議の記録[2][3][4][6][7]を参照されたい。『資本論』あるいはマルクス主義の世界的規模での影響とその現実的意義をうかがうことができる。

〔種瀬 茂〕

### ドイツ

I. マルクスの母国ドイツは東西に二分されており、『資本論』100年を記念するにあたって、ドイツ民主共和国(東ドイツ)が圧倒的に大規模な記念事業を展開した<sup>1)</sup>。ドイツ連邦共和国(西ドイツ)での記念の仕事はひじょうに少ないが、内容上興味深いものがある。まずドイツ民主共和国の記念の諸事業を概観しよう。

記念の出版物として、書物には、普及型のマルクスの伝記[11]とマルクス夫人の伝記[8]、マルクスとエン

1) 1968年5月5日はマルクス生誕150周年および『共産党宣言』刊行120年にあたり、前年につづいて記念の行事が行なわれているが、以下では『資本論』第1部100年記念を主とした。マルクス生誕150年については、記念集会、雑誌記念号がある。

記念集会は、(1)1968年5月2日~4日、ベルリン、ドイツ社会主義統一党中央委員会主催。(2)1968年5月25日~26日、ベルリン、ドイツ科学アカデミー哲学部主催、がある。

雑誌記念号としては、*Einheit*, 32 Jhg.(1968)H. 4/5, *Wirtschaftswissenschaft*, 16 Jhg. H. 5, März 1968, がある。

1) K. Marx, *Das Kapital*. Bd. 1, 1. Aufl., Hamburg 1867, 4. Aufl. hrg. von F. Engels, Hamburg 1890, K. Marx u. F. Engels, *Werke*. Bd. 23, Berlin 1962.

2) В. И. Ленин, "Империализм, как высшая стадия капитализма." Петроград 1917, "Полное собрание сочинений." том 27.

ゲルスの蔵書目録 [18], 『資本論』刊行後のドイツ労働者階級への影響 [6] [30] がある。[11] はマルクス伝として小さいものであるが、東ドイツでははじめてであり、一般への普及を目指したものであり、[8] は著者ドルネマン女史の同名の著作1953年版を大幅に改訂したもの。[18] はマルクス=エンゲルス蔵書がたどった歴史をのべた序文をもち、興味深く、また目録作成の苦心を思わせる。次の [30] は [6] の要約的論文である。[6] は『資本論』刊行後の1867~1878年における、ドイツ労働者階級への影響の経過を解明したもので、本書後半は、マルクス=エンゲルスなどの手紙、新聞・雑誌における紹介・批評をあつめ、貴重な文献集である。研究書として価値および剰余価値論 [17], 『資本論』の哲学的意義 [28] などがある。[28] は筆者未見。

記念の論文集としては案外少なく、「カール・マルクス」党学校編集のもの<sup>2)</sup> [14], 雑誌で『資本論』100年記念号を特集したものに、『ドイツ哲学雑誌』第15巻(1967)第8号、『統一』第22巻(1967)第7号、『経済科学』第15巻(1967)第6号など<sup>3)</sup> がある。もちろんその他の諸雑誌でも100年記念論文を所収している。この『経済科学』は、上記記念号第6号とそれにつづく第7・8号において、次にのべる記念研究集会の主報告7篇をのせている。これら主報告者の多くは『統一』の上記記念号にも論文をよせている。

もっともめざましい記念事業は、研究集会であり、1967年中に種々の分野にわたり大きな規模でいくつも開催された。知りえた限りを日付け順に紹介しよう。

1. 6月19日~21日および26~28日。ベルリン。第1集会のテーマは「社会主義政治経済学に対するカール・マルクス『資本論』のアクチュアルな意義」で、ドイツ社会主義統一党 (SED) 中央委員会社会科学研究所その他の主催。参加者はソ連はじめ東欧諸国の研究者をふくめて、五百数十人。第1日はラインホルト教授の主報告 [33] 他諸報告、第2・第3日は、次の4分科会に分かれて研究報告と討論が行なわれた。第1分科会は社会主義商品の問題で、主報告はシュリーサー教授 [36], 第2分科会は社会主義の経済成長問題で、主報告はシュタ

イニッツ博士 [38], 第3分科会は社会主義の管理運営の問題で、主報告はコツィオレーク教授 [23], 第4分科会は社会主義国際経済の問題で、主報告はコールマイ教授 [21] である。提出された論文は105であり、社会主義経済学上の諸問題をもうら的に討議している。

第2集会のテーマは、資本主義体制の矛盾の深化とプロレタリアートの状態および闘争であり、主催者はフンボルト大学その他。第1日には、クライン教授 [19] およびレムニッツ教授 [25] の主報告、第2・第3日にはその他の報告討論が行なわれた。とくに西ドイツを中心として国家独占資本主義の諸問題、労働者階級の状態およびその闘争が論議されている。以上の6月研究集会は、社会主義・資本主義をふくめて現実的諸問題を提起し、『資本論』を基礎にしたマルクス経済学の解決について種々の見解を検討しており、マルクス経済学の現状を一望におさめうるの観を示している。この研究集会に関する記録は『経済科学』誌にある [9] [24] [29] [1] [2] [42]。

2. 9月12日13日。ベルリン。SED中央委員会主催の記念国際学術会議。ウルブリヒト第1書記の報告 [41], および各国共産党などの代表の報告 [43] が公刊されている。各国における『資本論』の受容の経過、現在の諸問題に対する意義が明らかにされていて興味深い。

3. 9月21日22日。ライプチヒ。同地のカール・マルクス大学経済科学部の主催で、同大学以外から国外をふくめて300名以上の出席者。主報告は同大学ハインツェ教授の「労働者階級の闘争に対する『資本論』の意義」。集会は次の4分科会に分かれて報告討論が行なわれている。第1分科会は社会主義経済の計画指導の問題、第2分科会は社会主義商品の問題、第3分科会は西ドイツ国家独占資本主義の問題、第4分科会は西ドイツのブルジョア経済学および右翼社会主義経済学の批判、である。本集会の記録があり [34], また報告集の刊行が予告されている [13]。討論の主内容は1にあげた6月のベルリンの研究集会とほぼ同じ性格である。

4. 9月28日29日。ベルリン。マルクス=レーニン主義研究所主催。ドイツ労働者階級に与えた『資本論』の影響を中心として、多くの歴史研究にかんする報告が行なわれている。ドルベク報告は、前掲著書 [6] からさらに研究をひろげ1878-1895に関して『資本論』の影響を明らかにしている。1945年の「第1国際ナショナル」百年記念より引続き進められているドイツ労働者階級にかんする歴史研究が、この集会でも示されている。本集会の簡単な記録がある [4]。

2) レーニン『帝国主義論』刊行50年記念をもちかねている。編集者ヘロルド教授の巻頭論文「マルクス=レーニン主義——われわれの時代の真理」[15] 以下10論文を収載している。

3) *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 15 Jhg. (1967) H. 8, *Einheit*, 22 Jhg. (1967) H. 7, *Wirtschaftswissenschaft*, 15 Jhg. (1967) H. 6. 以上3誌の収載論文は合計18。

5. 10月17日～19日。ベルリン。ドイツ科学アカデミー経済科学研究所主催で、とくに経済成長の問題を中心として行なわれた点に特色がある。第1日はエルスナー教授、ブラウンロイター教授の主報告とアガンベギャン教授(ソ連)、ミンク教授(ポーランド)らの報告。第2・第3日は3分科会に分かれての報告・討論・総括が行なわれた。すなわち、第1グループは、マルクス主義成長理論の基本問題について、マイヤー博士の報告と多くの問題についての討論、第2グループは社会主義および資本主義における計画についての問題で、社会主義経済計画、価格・利潤問題および国家独占資本主義のもとでの経済成長政策が論ぜられている。第3グループは社会主義および世界経済における国際経済の諸問題についてである。本研究集会の記録がある[7]。

6. 11月16日17日。イェナ。同地のフリードリッヒ・シラー大学哲学研究所主催で、「カール・マルクス『資本論』百年と弁証法的方法」というテーマの哲学研究集会である。主報告はメンデ教授の「マルクス『資本論』の弁証法的方法とドイツ民主共和国における発展した社会主義社会体制」である。そして討議は次の4点を中心として行なわれた。すなわち、1. 科学的展望の用具としての唯物弁証法、2. 『資本論』における弁証法的唯物論の方法にかんする諸問題、3. 主体-客体-弁証法について、4. プルジョア・イデオロギーおよびマルクス批判への批判であり、哲学上の諸問題が総括的に検討されている。本研究集会の記録がある[26]。

以上6つの記念集会を通して、つぎのような特色と意義を知ることができる。第1はその主題の広範さ、国内外の参加者の多数な点で、まことに大規模な記念事業といえる。このことは『資本論』を中心としたマルクスの思想や理論が、哲学・経済・政治・歴史など全分野の諸研究にその基礎的思考を提示していることを明らかに示している。第2に見られる特色は、現代の諸問題に与える『資本論』の意味が、強く貫ぬかれて追及されている点である。この点はドイツ民主共和国が社会主義建設において一段と新しい躍進を目標に発展しようとしている現状と密接にむすびついており、つねに『資本論』と現実実践とが結合しているといえる。

II. 『資本論』に関連して取り扱われているテーマは以上にもみるように多方面にわたっているが、以下経済学に直接関連ある問題について、諸研究や討論に示された特徴をまとめてみよう。全般に流れている基調は、社会主義に関しても資本主義に関しても、『資本論』の現代的意義を追求していることである。『資本論』から百年

を経過して、すでに現状には適用しえないものとなった、という批判が一般になされているのに対しても、反批判を行なう必要がある。『資本論』の積極的な意義はどこに求められているであろうか。

A) 社会主義経済学については、ラインホルト教授が次の4点に要約している。1. マルクスの方法すなわち唯物弁証法と史的唯物論、2. 資本主義体制の総体的構造と発展の基本的分析、3. 経済的諸法則の解明、4. 社会主義・共産主義の基本的規定、という点である([33] s. 888-890)。1と2に関しては、哲学・社会学などの新しい研究とも関連しているが、後述することとして、経済学上の問題として、3について、さらにみてみよう。

これについては、前述の1967年6月のベルリンにおける研究集会その他で多くの研究・討論が展開されている。主要論点は次の通りである。

1. 商品生産・価値法則に関連のある問題。これについては、社会主義経済が計画を基本とする経済制度であること、しかも商品生産を計画的にその内部に包摂し、国家・企業集団・各個人の利害が総合的に調整されつつ、社会全体として生産力の最大限の発現が現実化される体制であること、以上の点では基本的に一致がみられている。

しかしながら、各経済主体の利害の調整にさいし、計画と市場とはどのように関連されるべきか、価格体系と価値法則はどうか関係付けられるか、などの問題について、種々異なる見解が示され、論戦を展開している。

シュリーサー教授は社会主義計画内部における商品生産の重要性について次のように強調する。企業において投下された労働と社会的必要労働との間の矛盾を解決するために、それが社会的価値に還元され、価値法則に従って交換される必要がある。それを保証するのが商品としての生産物の実現であり、社会主義市場の積極的な経済的役割(確認する機能)の基礎はここにある([36] s. 907-908, [24] s. 1426-1428)。計画内部における市場の役割りについてとくに強調する見解は、チェコスロバキヤのザヴァダ教授([24] s. 1426-1427)、あるいはポーランドのポホルル教授([9] s. 1416-1418)によって示されている。しかし多くの論者はむしろ、市場は計画内部において利用すべきであるという点に強調をおき、企業と国民経済との調和がもたらされる点を主張している。その調和が社会主義経済では本質的に協力という関係によってもたらされる、と指摘するのみではなく、具体的に把え分析する必要がある、と結論されている([24] s. 1428)。

以上と関連して価格体系の問題が論点として取りあげ

られている。すでに社会主義経済学分野で広く論争されてきた問題であるが、討論の中で注目すべき点として、次のようなものがあげられよう。第1は、『資本論』における価値と価格の体系的展開を基礎にして、社会主義における価値のモデフィケーションを考察し、それにより価格を基礎付けようという見解である。(マン教授 [24] s. 1428-1429) 第2は、経済成長・技術革命の要因を考慮した、動態的価格体系の必要が強調されている [24] s. 1429-1930)。第3には、潜在価格 (Schattenpreisproblem) に関するシラー博士の報告 ([24] s. 1431-1432) にみられるように、新しい機能分析を試みている、点である。これについてはいまだ抽象的で、その具体化への出発点としての意義がみとめられている。

価格体系の問題は、企業の独立採算性の問題、利潤や利子の問題をもふくみ、社会主義経済の運営・指導上の主要な論点であるが、多くの側面から議論が展開され、討論されているというのが現状といえよう。

2. 経済成長の諸問題については、次の諸点が焦点となっている。(1) 社会主義成長理論の課題と位置付け。『資本論』全3部で分析されているように、資本主義のもとでも経済成長は経済の合理性を高め、生産力を増進させる。だがそれは搾取と競争のもとにおいてであり、生産力と生産関係の諸矛盾を尖鋭化するのである。これに対する社会主義下の経済成長が生産者間の合理的人間関係の発展を、社会的再生産過程の計画指導のもとでもたらし、生産力発展の要請に相応するものである。「真実の経済——節約——は労働時間の節約である。」<sup>4)</sup> 「この領域における自由は、ただ、社会化された人間・結合せる生産者たちが、自然とのかれらの質料変換により盲目的力によっての如く支配される代りに、この質料変換を合理的に規制し、かれらの共同的統制のもとにおくという点——最小の力を充用して、かれらの人間性にもっともふさわしくもっとも適当な条件のもとで、この質料変換を行なうという点——にのみありうる。……労働日の短縮は根本条件である。」<sup>5)</sup> このようなマルクスの解明が、社会主義経済成長の本質として指摘される。([38] s. 926-928)。

これに関連してチェコスロバキヤのゴールドマン博士により、景気循環研究が短期の経済成長分析および政策に

対して有意義である、との主張がなされ、これに対してその現実との関連で批判がなされている ([29] s. 1442)。

(2) 社会主義経済成長の目標と基準。目標に関連して、勤労者の生活水準の向上を第1義におき、国民所得中の消費部分の増大を中心とする見解に対し、国民所得全体が問題であるとし、そのためには蓄積と消費の調和的発展が必要であるという見解が多く展開されている ([38] s. 930, [29] s. 1444)。また経済成長によってなしとげられる効果、とくに国民経済的効率を測定する基準の問題について、ファンド効率の強調がなされているが、そのみでなく、労働生産性全般についての検討が要請され、とくに、生きた労働と基本ファンドとの代替関係が注目されており、すでに、コブ=ダグラス関数の利用による効率指標の総合も試みられている ([29] s. 1442, 1447-1448, なお [3] も参照)。

これに関連して、(3) 科学技術革命のもとでの成長要因の分析が強調されている。とくに研究開発に中心がおかれている ([29] s. 1448, 1450.)。 (4) 経済成長モデルの作成とその計画指導への利用。マルクスの再生産表式を基礎として国民経済計算およびそのモデル化の試みが展開されていることは周知のことである。討論の中では、基本ファンドを再生産・成長のマクロ経済モデルに導入して考察することや連続的動態過程の分析が強調されている ([29] s. 1451-1452, [27])、また成長を規定する諸要因の相互関係の問題 ([39] s. 945-949)、その自由度の問題 ([7] s. 136-137) がとりあげられている。

3. 社会主義経済に関しては、さらに計画指導と企業運営の諸問題 ([23] [1]) や国際経済の諸問題 ([21] [2]) がテーマとしては重要であるが指摘するにとどめる。

B) 資本主義に関しては、50年記念を迎えたレーニン『帝国主義論』をもふくめて、現在の国家独占資本主義の分析が中心テーマとなっている。

興味深い点は、第1にクライン教授の従来までの研究の反省である。従来現実分析において、独占の集中化や資本主義の諸矛盾という諸事実を指摘してきた。問題はこれら諸事実を、本質から現象へと理論的に体系化して把える必要にあると、クライン教授は強調し、『資本論』の方法に学ぶべきであるとしている ([19] s. 965-967)。

第2に、独占と国家との関連、国家独占資本主義下における独占利潤のメカニズムについて議論が展開されている ([42] s. 1502-1505)。ヘンベルガー教授、ヘス教授は国家独占資本主義の利潤メカニズムの特徴をあげ、「個別独占体はもはや国家独占によって設定された諸条件にもとづいてのみその再生産を遂行しうる」のであ

4) K. Marx, *Grundriße der Kritik der Politischen Ökonomie*, Berlin 1953, s. 596. 高木監訳、『経済学批判要綱』第3分冊。

5) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. 3. K. Marx u. F. Engels, *Werke*. Bd. 25. Berlin 1964, s. 828. 長谷部訳。

て、「国家独占資本主義のもとでは私的独占はもはや存在しない」(ヘンベルガー教授)とされ、あるいは、国家独占資本主義のもとでは独占体の発展により、ますます平均利潤率のような基本的法則性はもはや存在しなくなっている(ヘス教)というように、従来の見解への強い批判が提起されている。利潤のメカニズムが国家独占資本主義のもとでどのように変形しているか、を通して、国家独占資本主義の本質規定に迫ろうとするわけであるが、クライン教授も指摘しているように、私的独占の存在を本質的に認められないとするのは誤りであろう。問題は利潤メカニズムについてのいっそう現実的理論を展開することにある([42] s. 1504)。

第3は、ブルジョア経済学批判の問題である。この点では西ドイツにおけるネオ・リベラリズムによる市場経済論、ケインズ経済学以後の成長理論の展開が批判されている([9] s. 1420-1424, [34] s. 294-296.)。それらのイデオロギー的性格が根本的に批判されているのであるが、同時にまたその機能分析の摂取が進められつつあることは注目に価しよう([7] s. 136, [27])。またヤーンの著書[17]は、ブルジョア経済学によるマルクス労働価値論・剰余価値論批判に反批判を与えつつ、マルクス理論の展開を目指したものである。著者はベーム・バベルクよりロビンソン夫人にいたるマルクス批判に広く視野を拡げ、これに答えて、『資本論』の価値、剰余価値、労働力商品、資本の概念を、独占段階・社会主義商品にもふれつつ展開している力作である。

C) 最後に、経済学の方法に関連して、哲学や社会学との関連がとくに強調されている([33] s. 888, [42] s. 1496-1497)。たとえば、第1に経済社会構成体という概念を基礎にして、社会を統一的な総合的な体制として把握する点が強調され、これに関連してサイバネティクスやモデル化の方法の利用が進められている([20] s. 932, [9] s. 1415-1416, [40])。

第2に経済の運動法則に関連し、矛盾と運動に関する分析が強調されている点である([39] s. 953-955)。たとえば国家独占資本主義が、第2次世界大戦後にみられるように、技術の急激な発展に応じた資本の運動形態となっているが、それは従来の独占資本が対応しえずに発生せしめた諸矛盾を、一時的に解決すると同時に、新しい独自の諸矛盾を発生せしめる。このような矛盾分析が強調されている([19] s. 929.)。

第3には、主体・客体の弁証法的関連についての分析である。経済の客観的法則性は、自動的に存在するのではなく、社会的人間の活動を通して発現する。そこに人

間の主体的要因が強調される。これは、一方では「疎外された労働」を現実的な経済社会の具体的人間主体として把握する必要、つまり『資本論』における労働者階級の主体としての把握に学ぶ必要と、他方社会主義建設における主体の実践的意義の強調とを意味している([26] s. 495-496, [9] s. 1412, [20] s. 929-931.)。

東ドイツにおける最近の哲学研究は注目すべき展開を示している<sup>6)</sup>、また社会学研究[5][40]も重視されていることは見過しえない点である。マルクス経済学の発展に対しても強い影響を次第に及ぼしつつあることは、以上によって知りうるところである。

III. 西ドイツでの記念行事は東ドイツに比してきわめて少ない。たとえばオット教授の論文[32]は、マルクスの再生産表式論について述べたものであるが、紹介の域を出ない。

注目すべきは1967年9月14日～16日、フランクフルトのゲーテ大学政治学研究所主催の研究集会である。その報告および討論が公刊された[10]。参加者は国外から米・仏・オーストリア・東独・ポーランド・ユーゴなどの研究者が加わり、異なる意見が直接討論を展開しあっている点で興味深いものがある。

1. 経済学の方法に関連して、ロズドルスキー氏<sup>7)</sup>の報告[35]は、学説史的展望にたちつつ、本質から現象へと展開するマルクスの経済学体系を重視し、とくに『資本論』第3部における競争分析が、「独自の方法上の区別」にもとづくものである点を強調している。これに対して哲学的側面から概念の規定・展開への不完全さ、ヘーゲルの把握への批判が提起されている([10] s. 21-29)。その他に、「構造主義」「疎外された労働」をめぐる討論がある([10] s. 58-80, 93-114)。

2. 資本主義に関連しても多方面にわたり報告がなされているが、ここでは、ギルマン氏の福祉国家批判にかんする報告[12]とそれに対する討論者オルトリープ氏

6) たとえば東独ではじめての哲学教科書[22]の刊行や、『ドイツ・イデオロギー』第1部新版刊行に付されたザイデル論文[37]とそれをめぐる『ドイツ哲学雑誌』誌上の討論に、その一例を見ることができる。

7) [10]の編集者による参加者紹介によると、ロズドルスキー氏は1967年10月、すなわちこの研究集会直後にデトロイトで死去された。もっともロズドルスキー氏およびつぎにのべるギルマン氏とも、9月の研究集会には報告論文を提出しているのみで、直接は参加してはいない。ロズドルスキー氏のようなすぐれた研究者の死去はまことに残念であり、哀悼の意を表わす。

のコメント [31] にふれるにとどめる。オルトリーブ氏の福祉国家論に対しては現実に存在する諸矛盾をあげて多くの批判が討論者から提示されている。資本の強力な集中化、構造的危機、過剰生産と失業などを氏は把えていないというわけである ([10] s. 164-174.)。

3. 社会主義経済に関しては、商品生産の利用にかんし、その現実的・理論的分析が討論されている。オーストリアのホフマン教授 [16] が、一般均衡論体系の計画経済的利用を強調するのに対して、東独経済学者その他から批判がある ([10] s. 268-287, 343-358)。社会主義内部でも意見の差はみられて注目すべき討論である。一般に西欧研究者の社会主義経済の現実についての理解はけっして十分ではないことを示している。この交流は今後の成果をひき出す第1歩である。種々の見解が直接に接しあって議論を展開し、その中でたとえば以上にあげた諸点にみられるように、福祉国家論批判、社会主義商品論など、マルクス経済学のいっそうの展開が示されることとなっているのであるから、その意義は大きい。

[種瀬 茂]

## ソ ヴ ェ ト<sup>1)</sup>

I. 1967年はソヴェトにとって3重に記念すべき年であった。10月革命50周年、レーニン『帝国主義論』出版50周年、マルクス『資本論』第1部出版100周年の3つの記念が同年に集中したためである。これら3つの記念事業は平行して行なわれるが、10月革命とそれに直接に貢献した『帝国主義論』50年の記念事業が優先されたのは当然であったといえよう。『資本論』第1部の出版記念は、翌年のマルクス生誕150年記念にひきつがれ、両年にわたってマルクスの偉業を記念するということになる。

主だった記念事業としては、マルクス『資本論』100周年記念の学術会議が1967年9月に、マルクス生誕150周年記念の学術会議が翌年4月にモスクワで開催された。前者の報告は『マルクスと現代』[22]に集録出版されており、会議の様子は『世界経済と国際関係』誌1967年第12号 [34]<sup>2)</sup>が伝えている。後者についても報告集の出版が予告されている。また主だった学術誌はそれぞれ特集を行なっており<sup>3)</sup>、マルクス記念論文の数はまった

く膨大である。それらのなかには、「マルクスの学説は正しいがゆえに全能だ」とか「永久に生きる革命的理論」といった調子の紋切り型の記念論文が多いが、社会主義革命から半世紀の年月が流れ、いまや共産主義段階への移行が現実的課題となっていながら、社会主義の「政治経済学」の体系化はいまだに模索の域を出ていないという現状をふまえて、『資本論』の方法から何物かを学びとろうとする志向が強い。

この期に合わせてマルクスの未公開草稿の出版計画も進められており、すでに出版された『数学草稿』[26]につづいて、1861~63年に書かれた23冊のノートのうち第5冊の大部分と第9・10冊の1部が『自然科学と技術の歴史の諸問題』として出版される [21]。これは『資本論』第1部第13章の原型をなすものだといわれている。また『経済学批判』草稿の未公開の1部が発表され [19]、『資本論』第1版第1章への附録「価値形態」が『哲学の諸問題』の『資本論』100年記念号 [25] に掲載されている。5年がかりで行なわれたマルクス・エンゲルスの蔵書の整理の中間報告 [18] もでた。また1957~67年間のソヴェトでの『資本論』研究の主要文献目録 [30] はソヴェトの『資本論』研究の層の厚さを如実にしめしている。

II. マルクス記念出版書のうち、エル・イ・アヴァルキン編『K. マルクスの『資本論』と社会主義の政治経済学』[1] は、どちらかといえば入門的解説的なものであって特に問題とするにはおよばないけれども、エヌ・ア・ツァゴロフが編集し、それぞれ序論を書いている2冊の論文集『『資本論』の方法と社会主義の政治経済』[31] と『K. マルクスの『資本論』と現代資本主義の諸問題』[32] は、編者の序論に力が入っているばかりでなく、執筆者が若い(たいていが助教授である)せいもあって、意欲的な問題提起がみられる。

ある。『資本論』100年記念特集, Вестник Московского университета, экономика, No. 4, 1967. Вопросы истории КПСС, No. 7, 1967. Экономические науки, No. 8, 1967. Вестник Академии наук СССР, No. 8, 1967. Вопросы философии, No. 9, 1967. Социалистический труд, No. 9, 1967. Вестник статистики, No. 9, 1967. Вестник Ленинградского университета, No. 11, Маркс生誕150年特集号, Вопросы истории КПСС, No. 1, 2, 3, 4, 5, 1968. Вопросы истории, No. 3, 4, 1968. Новая и новейшая история, No. 3, 4, 1968. Экономические науки, No. 4, 5, 1968. Плановое хозяйство, No. 5, 1968. Мировая экономика и международные отношения, No. 5, 1968. Вопросы философии, No. 5, 1968.

1) この調査には一橋大学大学院経済学研究科博士課程の長島誠一氏の貴重な協力を得た。

2) これにこの紹介論文の抄訳が含まれている。

3) マルクス特集号を出した学術誌はつぎの通りで

1. ツァゴロフは[31]<sup>4)</sup>に「K. マルクスの『資本論』の方法と社会主義の政治経済学における抽象の限界に関する問題」という序論を書いているが、ここでかれが取上げているのは、アヴァルキンが[1]の序論で指摘したまま明確な見解を示さなかった問題、すなわち、社会主義における端初的経済細胞は何か、それと関連して、社会主義の政治経済学において商品生産および商品貨幣関係をどのように位置づけるかという周知の係争問題である。この問題に対して、ツァゴロフは、社会主義経済の本質は社会全体の計画的経済運営(хозяйствование)にあるとする立場から、商品貨幣関係は捨象されねばならないと力説する。この問題提起を直接に受止め、リシチキン<sup>5)</sup>やレオンチェフ等の市場機構重視説の批判から始めて、社会主義の特殊法則としての価値法則と一般法則としての計画化との一致・従属・利用の問題を、社会主義的管理問題にまで上向させて論じたのが、ゲ・ア・シャフトフの力作、「社会主義における計画関係と価値関係の統一と従属」である。ヴェ・ペ・シクレドフは本書に「社会主義の経済関係における矛盾」という興味あるテーマを取扱った論文を書いているが、展開は未熟で、他に発表した「K. マルクスの『資本論』における所有概念の完成史」[33]のほうが興味深い。

2. ツァゴロフ、キロフ編の[32]<sup>6)</sup>は問題作といつてよい。ツァゴロフは序論『『資本論』と現代資本主義研究上の方法的諸問題』において、独占資本主義の理論的カテゴリーは、資本主義一般に通ずるカテゴリーと独占資本主義に固有のカテゴリーからなり(前を「旧体系」、後者を「新体系」と呼ぶ)、後者は前者の「上部構造」(надстройка)として構築されるべきであって、新しい現象形態があらわれた時に、それは「旧体系」に属する本質の単なる現象形態の変化にすぎないのか、「新体系」とみなすべき新しい本質のとり真に新しい現象であるかをみきわめる必要があると説く。編集過程でどの程度相互討

4) 本書の篇別はつぎの通りである。第1篇「社会主義の政治経済学の若干の一般的問題」、第2篇「社会主義の生産物の要因と形態」、第3篇「計画的価格形成」、第4篇「管理の諸問題」。収録論文は12である。

5) 批判の対象になっているのは Г. С. Лисичкин ; План и рынок, 1960 である。

6) 本書の篇別はつぎの通りである。第1篇「資本主義諸国における現代の科学技術革命の矛盾について」、第2篇「金融資本の問題」、第3篇「循環の問題」、第4篇「独占的超過利潤」、第5篇「農業問題」、第6篇「プロレタリアートの状態と闘争」。収録論文は14である。

論が行なわれたかはわからないが、本書にはこの問題提起に答えるファクツ・ファインディングや新解釈が多い。

まず注目すべきは、エス・エム・ニキーチンの論文「現代資本主義諸国の経済の構造変化」である。かれは、マルクスが指摘した資本節約傾向を、資本集約度(капиталоемкость)と原料集約度(материалоемкость)——両者はそれぞれ製品1単位当りの資本設備と原材料の割合である——にわけて検証した結果、先進資本主義国において相対的に高い成長率を達成した国の工業における資本集約度は低下ないし安定しており、低成長率の国でのみそれは上昇していることを確認し、資本集約度は労働の資本装備率を労働生産性で割ったものに等しいから、現代の科学技術革命は「労働の資本装備率のより緩慢な増大のもとで労働生産性を高める可能性を与えるような方向をとっている」(стр. 10)と推定している。これは、マルクスの資本の有機的構成の高度化命題に対する反論として西欧の経済学者が早くから指摘していた事実を承認したことを意味するばかりでなく、理論的には、成長(拡大再生産)過程において蓄積のもつ意義の相対的比重の低下をも含意するものであるが、後の点に関しては、ニキーチンも、またかれのファクツ・ファインディングを受入れて「現代資本主義の資本蓄積と科学技術革命」を論じたア・エフ・ニコライエフもともに強く否定している。

金融資本の問題では、現代の金融資本を、産業資本と銀行資本の癒着(сращивание)としてだけでなく、融合(слияние)を含めた複合体の総体として把握すべきであるとして、硬直的金融資本概念からの脱却をはかっているエス・エム・メニシコの「現代の金融資本の構造と金融寡頭制について」が、循環の問題では、自由競争段階においては、資本主義の基本矛盾は周期的恐慌となって爆発したが、国家独占資本主義のもとでは、独占による生産調整と国家の景気対策によって、基本矛盾の発現形態としての恐慌は変容をこうむり、それに代わって過剰能力の累積化と過少生産の傾向が慢性化する傾向があると主張しているユ・エム・イワノフの「マルクスの恐慌理論と資本主義の基本矛盾の発現機構の変化」が注目してよい論文である。

筆者にとって最も興味深かったのは、「資本主義の利潤にかんするマルクスの学説からみた独占利潤」を論じたヴェ・イ・ボブレンコ論文である。かれは2つの主要論点をうちだす。第1は、独占段階では平均利潤法則は作用を停止したという命題であり、第2は、独占利潤=非独占利潤プラス独占的超過利潤という規定である。か

これは、従来支配的見解であった独占資本主義下の平均利潤法則支配説を批判するために、新しい理論的根拠をしめす——これには若干問題点がある——だけではなく、アメリカ合衆国の製造業における利潤率の計算による実証も試みており、その結果、独占資本主義段階において「資本制生産様式の諸法則は、利潤率が均等化する傾向が存続することにあるのではなく、商品価値と報われることなく収奪された不払労働の総量が、独占的超過利潤と独占利潤形成の基礎的客観的限界および源泉であるという点にあらわれる」(стр. 394)と結論する。第2の命題では独占的超過利潤を独占資本の取得する構造的な高利潤と規定し、本書の他の論文で重視されている科学技術革命との関連でそれを取扱う余地を排除している点に若干の不十分さを感じざるけれども、ポブレンコの議論は高い説得性を持っている。

農業問題や労働者階級状態論にも多くのスペースがさかされているが、特に言及する必要はない。ただ「現代における資本主義諸国のプロタリアートの状態について」論じたエム・エス・ドラギレクは、先進資本主義諸国での労働者階級の窮乏化の説明要因として「社会的貧困化」を重視しており、窮乏化理論としては価値以下説をとっている点を指摘しておけば十分である。

III. ソヴェトの『資本論』100年、マルクス生誕150年記念の研究作業で精力的な活動をしたマルクス研究家が2人いる。ヴェ・エス・ヴィゴツキーとア・エム・コガンである。新旧のマルクス研究態度をあざやかにわけた両者の活動はやや詳しい紹介に値する。

1. 1967~68年にかけてヴィゴツキーは、各種マルクス特集の学術誌に5本の論文<sup>7)</sup>(うち共論文1編)を発表すると同時に、マルクスの思想の発展を概観した英文の小冊子『永遠の書——K. マルクスの『資本論』の1世紀——』[10]を上梓し、さらに『K. マルクスの『資本論』にかんする理念斗争史概要』[8]の編著者として序論を書いている。かれこそはマルクスの記念作業で最も活躍した学者である。そこには長年のマルクス研究のうん蓄が一時にふきだした感すらある。だがかれは通念的なマルクス像を忠実に解説するだけであり、その叙述の仕方も、例えば182ページのポケット版の小冊子『永遠

の書』にマルクス・エンゲルスの古典からの引用が356にのぼるといふ古風なスタイルを踏襲している。むしろわれわれにとって興味のあるのは、『資本論』がこの一世紀間にたどってきた反撥と受容の歴史を概観した『理念斗争史概要』のほうであるが、編者の通念的解釈が基調となっているために、例えば、エリ・エル・ミシケヴッチの「マルクス経済理論の現代の批判家たちの弱点」によれば「マルクスの理論とケインズの理論はお互いに完全に矛盾」しあっており、何らの共通物もなく、第2次大戦後マルクス経済学に対するブルジョア経済学者の関心が高まってきたことは「人類の運命に対するマルクス主義政治経済学の影響が増大してきたことと、何か新しいものを創造する点でのブルジョア経済学者の無能力を証明」(стр. 256)したにすぎないというのであって、マルクス経済学は「資本制生産様式の発展法則」を研究するのは対して、ケインズ以降のマクロ経済学は「経済機能の法則性」を研究するのであって、それは明らかに「相対的独自性」を持つとしたヴェ・エリ・アフアナシエフの評価[3]、あるいは「現代ブルジョア経済学は俗流的弁護論的要素と認識・実践的要素のきわめて複雑な混合体である。……前者は批判・論駁し、後者はくわしく研究しなければならない」というイ・オサチャヤの考え方<sup>8)</sup>とのあいだにはかなりのひらきがある。

2. ヴィゴツキーが旧いマルクス研究の代表者であるとするならば、コガンは新しいマルクス研究の旗手である。かれはマルクスの「経済学批判体系」プランの研究家であって、すでに『K. マルクスの6分冊プランの方法と資本主義の一般理論の発展』<sup>9)</sup>という著作もあるが、かれのプラン研究はもとより単なる文献考証学ではない。それは、第1に、『資本論』の対象領域を厳密に規定することによって、その限界および残された問題の所在を明らかにするためであり、第2に、それによって『資本論』は資本主義全般の法則性の解明を完了したという幻想」([17] стр. 59)を打破するためであり、第3に、『資本論』では残されている諸問題の解決の出発点は『資本論』に含まれているという判断に立って、「K. マルクスの『資本論』への創造的接近」を試みるためである。

論文「マルクスの未完の研究プランについて」[15]で示されたコガンの基本的見解は、つぎの通りである。すなわち、マルクスの経済学研究の「決定的な方法論的

7) 5つの論文名は、「K. マルクスの科学的労作のスタイル」[4]、『『資本論』第1部の前史から』(エリ・ミシケヴィチと共同執筆)[5]、「K. マルクスの『資本論』と共産主義社会の経済学」[6]、「K. マルクスの『資本論』における科学的共産主義の経済的基礎づけ」[7]、「K. マルクスの唯物論的歴史把握の定式化」[9]である。

8) 「現代ブルジョア経済学における『新古典派』成長理論」[34]所収、引用は250ページ。

9) 未見、[30]による。



イデー」は、資本主義の一般理論「資本主義の基本的経済構造」の解明の理論とそれとは相対的に独自の運動をする経済的カテゴリーの特殊法則の特殊研究とを分離する点にある。この「方法論的イデー」は、「資本一般」を最初にすえる「経済学批判体系」プランにはっきりとみられ、その後も「不変」に保持されるのであるが、コガンによれば、「1857～59年当時においてマルクスは競争、信用等々のどのような問題が資本一般で解明されるか、どのような問題が特殊研究に属するかという問題を完全に解決していなかった」(срр. 87)だけではなく、「マルクスは、6分冊プランの決定的な方法論的イデーを『資本論』においてどれほどまで実現されているか」が重要な問題である。そして、『資本論』のなかで叙述が最も混乱している信用論についてこの問題を検討したのが、『マルクスの『資本論』における信用研究の方法」[13]である。この論文においてコガンは、資本主義の基本的生産関係への信用の全面的依存関係を明らかにするかぎりにおいて、利子生み資本の本質論はもとより信用制度論も「資本一般」に含まれねばならないと主張し、現行『資本論』第3部の信用の分析においてもマルクスは「資本制的生産過程の一般的性格づけのために必要な若干の論点に限定」しているけれども、結果的には信用の特殊研究に属するものを含んでいることを認める。そして、かれはそのようになった原因は、「原稿段階の研究過程と研究結果の叙述形式の相異」(срр. 33)にあるとして、現行『資本論』に含まれていると考える信用の特殊問題を丹念に指摘してゆくのであるが、それを紹介する余裕はない<sup>10)</sup>。このようなコガンの態度は現行『資本論』の純化を自らの手で行なおうとすることに他ならず、ソヴェトの『資本論』研究では斬新なものである。

だが、プラン研究はコガンにとって『『資本論』への創造的接近』のための準備作業に他ならない。『資本論』で解明された資本主義の基礎理論を出発点にして、『資本論』以降の資本主義の変化を明らかにすることがかれの本来の目的である。そのためにかれは『『資本論』の1命題の創造的適用』[14]、『『資本論』における生産的労働と非生産的労働の区別の問題』[16]および「マルクスの『資本論』と現代の社会・経済研究の諸問題」[17]を書く。[14]は、労働強化を伴った労働日の短縮が現代資本主義の1特徴であると考え、それが同時に『資

本論』で強調されている固定資本の節約をもたらすことを数字例をあげて論証したものであり、[16]は、非物的生産領域での労働も生産的労働であると主張した論文である。コガンの問題関心の全体像をスケッチした[17]は、上述の2論文で取上げた論点のほかに、農業においても資本の有機的構成が高度化してゆく現代資本主義の下での絶対地代は存続しうるかという問題や、窮乏化法則および価格形成に対する使用価値の役割の問題を取上げて、「現代の帝国主義経済は、19世紀中葉のイギリス経済よりもより豊富に、資本主義の一般理論のための材料を提供している」(срр. 57)といい、それによって、帝国主義の特殊性に適用される具体的命題の展開とならんで、「資本主義一般の法則性のより完全な暴露の方向へ向って『資本論』を具体化する可能性」(срр. 58)が与えられたと考え、『資本論』の具体化は、マルクスの6分冊プランの残された部分を「自主的創造的」に埋めてゆくことだと結論する。この研究態度とその成果は今後注目してよいといえよう。

IV. 最後に以上で言及できなかった著書・論文中印象に残ったものを若干列挙しておこう。

社会主義経済学は『資本論』の方法に従って構築されるべきであると考え、抽象から具体への上向法について哲学的考察を加えたエ・ベ・イリエンコフの「抽象から具体への諸問題」[20]、社会主義の商品にはフェテシズムがあるかを考察したカ・ベ・トロネフの「経済過程の本質と現象にかんするK.マルクス」[29](ただしかれの結論はまことに歯切れが悪い)、マルクスの価値論はすべての経済的カテゴリーの論理的基礎であると強く主張するイ・ソルレルティンスカヤの「マルクス価値論の生命」[28]、西独についての実証分析から、「一般的利潤率の傾向的下落に反対に作用する要因が、1950年から1960の始めにかけての西ドイツで、利潤率に対する資本の有機的構成の上昇の影響をわずかなものとした」と推定したベ・ベ・エヒモバの「現代資本主義下での利潤率の傾向的下落の法則の作用の特殊性」[11]、外国貿易に再生産表式の適用を試みているエル・アバルキンの『『資本論』における世界経済の諸問題』[2]、社会主義においても労働力を生産力視点だけからでなく、経済的カテゴリーとしてもみななければならぬとするベ・ベ・セメネンコの「K.マルクスの学説からみた社会主義における労働力の経済的特質」[27]、『資本論』における平均量・絶対量・相対量の概念を整理したイ・ゲ・マーリーの『『資本論』における統計の諸問題』[23]などである。

[高須賀義博]

10) 中野雄策「マルクス『経済学批判体系プラン』にかんするコーガンの研究」『山口経済学雑誌』第18巻第4号参照。これは[15]、[12]、[13]の詳しい紹介論文である。

## アメリカ・イギリス

I. 『資本論』初版出版100年を記念して3つの雑誌がそれぞれの立場で特輯を行なった。

*Science & Society*, A Centenary of Marx's Capital, Fall 1967, Vol. XXXI, No. 4

*Monthly Review*, Karl Marx and Das Kapital, December 1967, Vol. 19, No. 7

*The American Economic Review*, Das Kapital: A Centenary Appreciation, May 1967, Vol. LVII, No. 2

ほかに *Marxism Today*, Oct 1967, Vol. II, No. 10 が ドップの一論文 [7] を掲載している(もともとこの論文は *Science & Society* に書かれたもの [6] とまったく同一内容のものであり、もともとイタリア版『資本論』への序文だったものである [5])。

単行本としては、『資本論』100年を意識して出版されたものとしてホロヴィッツの編書 [14] をあげることができるであろう。しかし、この書物は過去に執筆され出版された雑誌論文、単行本のなかからマルクス経済学と近代経済学の接近に関係あるものの全部または一部を抜粋して編集されたものであって、ただ1つブロンフェンブレンナーの論文 [2] (もともと *Science & Society*, Fall, 1965 掲載のもの) だけが『資本論』100年を予告してその論旨を展開しているにすぎない。*New Left Review*, Spt.-Oct., 1967 は皮肉にも H・マルクーゼの革命問題というインタビューを公表しただけであった。だとすれば『資本論』100年の記念号としては上記の3つの雑誌に限定してよいだろう。

いまこれらの諸誌に掲載された諸論文をいくつかに分類してみると次のように排列することができるであろう。

(総括的なもの) ドップ [6], サムエルソン [20]。

(資本蓄積, 景気循環, 利潤率低下にかんするもの) ブロンフェンブレンナー [4], スゥイジー [24], シャーマン [22], シュレジンガー [21], アーリック [9]。  
(『資本論』の方法にかんするもの) ホッジス [13], ゴルドウェイ [11]。

(『資本論』にかんする随想) スゥイジー [25], 『マンスリー・レビュー』誌編集者 [17]。(他に) モリス [18], シュール [23]。

II. *The American Economic Review* の特輯は、アメリカ経済学会の1966年12月29日の年次大会の報告と論議を収録したものだが、ケインズ派の分析の歴史と比

較可能な、マルクスおよびマルクス継承者の経済学の論議は、イデオロギー抜きならば、大きな成果を生むにちがいない、というのがその基本的立場であった。ケインズ経済学とマルクス経済学の共存を試みようとするものだが、かってジョン・ロビンソン [19] によって主張されたように、近代経済学の分析用具を使って、マルクス経済学の成果を吸収しようとするものであった。*Science & Society* の場合には、ロシア革命50周年記念をも併わせて祝うという立場で『資本論』の現代における理論的実践的意義を強調するものであった。「愛を知らない人には明日は愛させよう。愛を知っている人には明日も愛させよう。」(*Science & Society*, Fall 1967, p. 386) という啓蒙の願いが込められている。これにたいして、*Monthly Review* は、『資本論』のなかには、すでに先進資本主義国と後進資本主義国との関係を論じようとしている箇所が見うけられる。この精神を今日に生かして世界的な資本主義体制のあり方に目を向けよ、というのが、その編輯の意図のようである。

そうした『資本論』100年の消化の仕方にちがいはあるにしても、さきに掲げた諸論文の排列が示すように、3つの雑誌を貫ぬく共通の問題があることに注意したい。第1に、資本蓄積論、再生産表式論、利潤率低下論に議論が集中していること、第2に、現在の資本主義体制の動向に関心が持たれていること、第3に、労働価値論の体系的な研究はほとんど問題にされていないということであろう。

第1の点に議論が集中しているのは、近代経済学の側から見れば、『資本論』のこれらの諸論点が「マクロ経済学の起源」をなすものであり、「ケインズとハンセンの停滞理論、ハロッドとドマーの動態理論、シュムペーター、カレッキー、カルドァ、グッドウィンの循環的成長理論、ジョン・ロビンソンの構造的失業理論」([14] p. 12) の先駆をなすと考えられるからであろう。そのかぎりでは「たんなる歴史的記述とは異なる経済発展の理論の確立を可能にした」([16] p. 76) というオスカー・ランゲのマルクス評価が継承されているともいえるであろう。このことは、『資本論』100年と時を同じくして発刊されたドップの退官記念論文集 [10] において、ハンガリー科学アカデミーのエルデスが「マルクス拡大再生産モデルの景気循環理論への適用」[8] を、ソ連ゴスプランのコムニスが「利潤率の低下の傾向について」[15] を論じているのを見ても、マルクス経済学の立場に立つと考えられる研究者もまた同じ次元で議論を展開しているといえてよい。第2に、資本主義の運動法則そのものにつ

いて、あるいは現在の時点の資本主義の機構そのものについて、近代経済学およびマルクス経済学の双方から深い関心が寄せられるのは当然のことであろう。サムエルソンは、マルクス経済学の動態理論としての優越性を認めたランゲでさえも、当面の諸問題、たとえば独占価格、貨幣および信用理論、租税負担または技術的革新が賃金にあたる影響についてはマルクス経済学はまったく無力だと認めたのではないかと指摘する。スウィージー・バランの『独占資本』[1]においても、彼らはマルクスの資本主義分析が終局的には依然として競争経済の前提に立っていることを承認しているのではないかとさえ批判する。

マルクス経済学がこれらの諸問題にたいして無力であったわけではない。われわれは、レーニン、ヒルファディング、ブハーリン、ヴァルガ、セレプリアーコフ等々の諸業績を思い出すだけでよい。だが、まさに今日の問題にたいして、マルクス経済学者たちが、これらの先人たちの業績を継承し発展させる積極的努力を欠いたことは否めない。スウィージー、バランの『独占資本』はそうしたギャップを埋める試みの1つであろうが、マルクス経済学にとってもう1つの大きな課題は、戦後の先進資本主義国における経済構造の変化、それに対応する世界資本主義の構造変化の問題であろう。スウィージーの「マルクスとプロレタリア階級」[25]はこうした問題に光をあてようと試みるものである。スウィージーはいう。

「資本主義を世界的体制と考えるならば、そしてそれが唯一の正しいやり方なのだが、そうすれば一握りの搾取国家と、はるかに多くの人口の多い被搾取国家群に分かれるということがわかる。世界資本主義体制では、これら被搾取従属国の大衆が、マルクスが近代産業の初期の時代のプロレタリアートを革命的だと考えたのと同じ意味で、また同じ理由で革命的な力を構成する。……第二次世界大戦後の世界歴史は、この革命的勢力が資本主義的支配にたいして、成功的な革命的闘争を現実に遂行できることを示している。」([25] p. 42.)

いずれにしても、近代経済学にとっても、マルクス経済学にとっても、資本主義の動向と当面の諸問題をどう分析するかが、鼎の軽重を問われる試金石だということを『資本論』100年は改めて俎上に乗せたといつてよいであろう。

第3に労働価値論の「体制理論」としての評価は英米ではほとんどなされないことは、わが国においては常識であろう。『資本論』100年の場合にも、労働価値論の批判の側も弁護の側も、ともにその「相対価格」論として

の妥当性に論点をあつめた。この点ではサムエルソンもドップも同じ問題意識の領域内にいるといつてよい。サムエルソンによれば、労働価値論は「スミスの黄金時代」に妥当するにすぎない。「科学の立場からすれば、労働価値論は資本という複雑な要因がモデルに入る以前でさえも崩壊している。土地が稀少で、さまざまな財が労働、土地集約度で異なっているならば、財は社会的必要労働量に比例しない相対価格で交換されるであろう。」([20] p. 619.)

これに反して、ドップによれば、労働価値論は最初は(『資本論』第1巻では)「最高の巨視的水準」で考察される。この段階では「個別生産物と個別産業」とは問題にならない([5] p. 254.)。問題なのはボーム・バヴェルク以来の、いわゆる「転形問題」、すなわち、価値論と生産価格論との関係である。この問題にかんするマルクスの数学的例解の誤りはポルトキエーヴィチによって解決されたが、最初の問題提起者ボームには「価値は生産価格の背後にあって、終局的には後者を規定するという命題に含まれている複雑な規定という考えが事実上ない」とドップはいう([5] p. 255.)。同じ批判はサムエルソンにも向けることができるだろうが、問題なのは価値を「資本主義のもっとも一般的な様相」([5] p. 254.)として把える、その把え方にある。ドップの場合でさえ労働価値論は「一般経済均衡の静態理論にすぎない」([16] p. 76)というランゲの批判を克服するにはなお不十分であるように思われる。A. A. コミュスが「労働価値論と計量経済学——それは限界効用理論に基礎をおいてはいるが——の結合は政治経済学の発展にとって必要である。はるか20年代の昔に、ソヴェトの経済学文献で、限界効用理論は労働価値論の否定(哲学的意味で)である。すなわち、前者は労働価値論の発展における1つの必然的な段階であるという見解が開陳された」([15] p. 80.)と書いているのは、労働価値論をたんなる「相対価格論」とみなす影響の1つであろうか。

III. さきにわれわれは『資本論』100年の論文の多くが、資本蓄積論、再生産表式論、利潤率低下論に集中したとのべておいた。近代経済学の側面からマルクス経済学に接近する場合とりわけケインズ派の視点から接近する場合には、これらの諸論点が共通の問題領域を提供することはいうまでもない。「マルクスがいたところで追究した「資本主義の矛盾」もマルクス自身の矛盾に比ぶれば大いしたものではない」([20] p. 616.)としてマルクスにきわめて揶揄的な態度をとるサムエルソンも「拡大再生産表」にたいしては比較的好意的である。彼によれ

ば「マルクスの拡大再生産モデルは、カッセル, D. H. ロバートソン, フォン・ノイマン, ハロッド, ドマーその他の人々が近代経済学においてあれほどまで流行させた複利率での黄金時代の成長径路についての, おそらくは最初の例であろう。」([20] p. 618.)そして「再生産表の複利成長率は, ローザ・ルクセンブルグやその後のマルクス主義者たちを悩ました過少消費のディレンマからの抜け道を提供することができる」([20] p. 619.)という。つまりサムエルソン自身の拡大再生産表によれば, 経済循環は「需要不足に陥ることなしに, 着実な幾何級数的成長率を達成するということは可能なのである。」([20] p. 619.)この見解は有効需要の原理にもとづく利潤率論でマルクスの再生産表式を補強しなければならない, と主張するジョン・ロビンソンの見解の1つの発展形態であろう。

これに反してブロンフェンブレンナーはサムエルソンとは逆に, ジョン・ロビンソンの示唆を踏襲しながら, 資本主義の停滞と崩壊のディレンマとその必然性をむしろ証明しようとする。ブロンフェンブレンナーはいう。

「資本家の側から見て, 流動性または在庫‘恐慌’ (不況) を避けるにたると高くなる利潤率も, 同時にまた, 過剰生産または実現‘恐慌’や失業の一そうの増加(産出高価値の減少)なしに, 体制の産出高を基本的に労働者階級によって‘実現され’購買されるようにするにたると低くなる利潤率も, 結局は見つけることはできないだろう。これこそが体制をして停滞と結局は崩壊に追いやるディレンマなのである。それは‘利潤率低下’と‘過剰生産傾向’の双方をふくんでいる。……このディレンマは同時に‘資本主義の矛盾’であり, ‘資本主義経済の運動法則’である。」([2] p. 206.)自ら「修正主義者」と称するブロンフェンブレンナーは, この見解をマルクスの再生産表式をワルラス流の一般均衡理論的見地から解釈することによってマルクス体系のあいまいさを修正しようとするのだが, 彼のいうディレンマは, マルクスの体制「矛盾」と一致しているわけではない。シーソーのバランスが崩れる程度の相反現象でしかない。

みられるように, サムエルソンの場合にもブロンフェンブレンナーの場合にも再生産表式の理解が直ちに現実の経済成長と循環の問題に直結しているのが特長である。このことはジョン・ロビンソンの場合にも, ここではふれなかったA・アーリック [9] の場合にも同じである。つまり「表式」分析が直ちに利潤率, 失業, 循環, 投資の具体的諸問題に結びつけて理解される。「表式」が『資本論』において位置する方法的意義と限界が理解されて

いない。「この過程そのものの複雑さは, 同じ数だけの異常な経過の誘因になる」というマルクスのもっとも初歩的な「表式」論でさえ, 静態と動態に機械的に区別して論ぜられる近代理論の方法によってうち消されている。価値論なき「表式」理解は同時にまた貨幣ぬきの「表式」利用であったわけだ。アメリカ経済学会での討論者 H. S. ゴードンがのべているように「現代の分析的な経済学のタームだけで『資本論』に接近するのは誤りであろう。」([12] p. 641)

それにしても, マルクス主義者だと自負する人たちが, たんにマルクスが展開した諸法則と現在の諸事象との検証に終始したり (R. シュレジンガー [21]) 景気循環を扱うにしても, マルクスのそれが「過少消費」と「過剰投資」の総合だと説明したり, 「循環的成長」の理論を発見する程度 (H. J. シャーマン [22]) であったり (『資本論』の方法) (D. C. ホッジス [13]) と称するものがマルクス用語の辞書的解釈にすぎないのは, まことにお粗末というほかはない。まさに「外国の卸売商館の小さい行商人」(『資本論』第2版への後書き)にすぎないという感がする。 [宮本義男]

#### 〔文献目録〕

#### まえがき

- [1] 京都大学経済学部調査資料室, 『資料月報』1968, 1-2, マルクス「資本論」100年, レニン「帝国主義論」50年, ロシア革命50年記念論文目録, [1968, 2] 107 ページ。
- [2] Малин, В. Н., А. И. Малыш, Н. Р. Митронов, А. М. Румянцев, Л. Н. Федосеев, Маркс и современность. Москва 1968.
- [3] 大塚金之助「マルクスと図書館」朝日新聞1967. 12. 27.
- [4] 『世界経済と国際関係』国際関係研究所訳, 第1集 1968.
- [5] Schliebe, I., I. Mill (hrsg.), Bibliographie zum Thema "100 Jahre, Das Kapital", *Wirtschaftswissenschaft*, 16 Jhg. (1968) H. 5. S. 841-848.
- [6] 都留重人「マルクス生誕150年記念集会——バーでの催おし——」, 『経済研究』Vol. 19, No. 3, July 1968. p. 276-279.
- [7] ZK der SED, "Das Kapital" von Karl Marx und seine internationale Wirkung, Beiträge ausländischen Teilnehmer an der wissenschaftlichen Session "100 Jahre, Das Kapital", veranstaltet vom ZK der SED am 12. und 13. September 1967

in Berlin. Berlin 1968.

### ドイツ

- [1] Baltrusch, E., E. Lüdtke, Bericht Arbeitskreis 3, Die Marxsche Analyse der gesellschaftlichen Produktion und die Hauptkettenglieder der Lehre von der sozialistischen Wirtschaftsführung, *Wirtschaftswissenschaft*, 15 (1967) 9, s. 1458-1477.
- [2] Becker, G., H. Bruder, Bericht Arbeitskreis 4, Karl Marx' Aussenhandels-theorie und Probleme der aussenwirtschaftlichen Beziehungen zwischen sozialistischen Staaten, *Wirtschaftswissenschaft*, 15 (1967) 9, s. 1478-1494.
- [3] Behr, J., K. Brünecke, Neue Methoden zur Messung der Volkswirtschaftlichen Produktivitätsentwicklung mit Hilfe Aggregierter Produktionsfunktionen, *Probleme der Politischen Ökonomie*, Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin, Jahrbuch des Instituts für Wirtschaftswissenschaften. Bd. 8, Berlin 1965, s. 69-95.
- [4] Beyer, M., Bericht der Konferenz, Hundert Jahre "Kapital", *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 16 (1968) 1, s. 84-86.
- [5] Bollhagen, P., Das Marxsche "Kapital" und einige Fragen der Theorienbildung in der gegenwärtigen Soziologie, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 15 (1967) 8, s. 934-951.
- [6] Dlubek, R. u. H. Skambraks, "Das Kapital" von Karl Marx in der deutschen Arbeiterbewegung (1867 bis 1878), Abriss und Zeugnisse der Wirkungsgeschichte. Berlin 1967.
- [7] Domin, E., G. Kalok, H. G. Meyer, P. Sydow, Bericht der Konferenz, Probleme des ökonomischen Wachstums—Karl-Marx-Konferenz des Instituts für Wirtschaftswissenschaften, *Wirtschaftswissenschaft*, 16 (1968) 1, s. 133-145.
- [8] Dornemann, L., *Jenny Marx*, Der Lebensweg einer Sozialisten. Berlin 1968.
- [9] Drechsel, E., H. Reichardt, W. Willkommen, Bericht vom Plenum der Konferenz, Die aktuelle Bedeutung des "Kapitals" von Karl Marx für die politischen Ökonomie des Sozialismus, *Wirtschaftswissenschaft*, 15 (1967) 9, s. 1409-1424.
- [10] Euchner, W. u. A. Schmidt (hrsg.), *Kritik der politischen Ökonomie heute, 100 Jahre <Kapital>*, Referate und Diskussionen von Frankfurter Colloquium im September 1967, veranstaltet vom Institut für Politikwissenschaft der Johann Wolfgang Goethe-Universität und der Europäischen Verlagsanstalt. Frankfurt a. M. 1968.
- [11] Gemkow, H., u. a., *Karl Marx, eine Biographie*. Berlin 1967.
- [12] Gillman, J., Ist der Wohlfahrtsstaat mit dem Kapitalismus vereinbar ?, [10] s. 148-157.
- [13] Heinze, A., S. I. Tjulpanow, hrg. im Auftrag der Karl-Marx-Univ. Leipzig, *Karl Marx "Das Kapital"—Erbe und Verpflichtung*. Berlin 1968.
- [14] Herold, M. (hrsg.), *Der Marxismus-Leninismus—die Wahrheit unserer Zeit*, Zum 100 Jahrestag des Erscheinens der ersten Bandes des "Kapitals" von Karl Marx und zum 50 Jahrestag des Erscheinens der Arbeit von W. I. Lenin "Der Imperialismus als höchstes Stadium des Kapitalismus". Berlin 1967.
- [15] Herold, M., *Der Marxismus-Leninismus—die Wahrheit unserer Zeit*, [14] s. 5-19.
- [16] Hofmann, W., Das "Wertgesetz" in der Erwerbsgesellschaft unserer Tage und in der sozialistischen Planwirtschaft, [10] s. 263-267.
- [17] Jahn, W., *Die Marxsche Wert- und Mehrwertlehre im Zerrspiegel bürgerlichen Ökonomie*. Berlin 1968.
- [18] Kaiser, B. u. I. Werchan (hrsg.), *Ex Libris, Karl Marx und Friedrich Engels, Schicksal und Verzeichnis einer Bibliothek*. Berlin 1967.
- [19] Klein, D., Über der innern Widersprüche des modernen Imperialismus, *Wirtschaftswissenschaft*, 15 (1967) 6, s. 951-992.
- [20] Koch, G., Philosophische Aspekte der Marxschen Analyse der ökonomischen Gesetze im "Kapital" und ihre Bedeutung für den Sozialismus, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 15 (1967) 8, s. 922-933.
- [21] Kohlmeier, G., Karl Marx Aussenhandels-theorie und Probleme der aussenwirtschaftlichen Beziehungen zwischen sozialistischen Staaten, *Wirtschaftswissenschaft*, 15 (1967) 8, s. 1258-1259.
- [22] Kosing, A., u. a., *Marxistische Philosophie, Lehrbuch*. Berlin 1967.
- [23] Koziol, H., Die Marxsche Analyse der gesellschaftlichen Produktion und der Hauptkettenglieder der Lehre von der sozialistischen Wirtschaftsführung, *Wirtschaftswissenschaft*, 15 (1967) 7, s. 1057-1082.
- [24] Lammich, K., K. Molkenkin, E. Scholze, Bericht Arbeitskreis 1, Probleme der Warenproduk-

- tion und des Wertgesetzes im Sozialismus, *Wirtschaftswissenschafts*, 15(1967)9, s. 1425-1439.
- [25] Lemnitz, A., Lage, Bewusstseinsentwicklung und der Kampf der Arbeiterklasse in Westdeutschland, *Wirtschaftswissenschaft*, 15(1967)8, s. 1260-1291.
- [26] Lindner, F., H. Malory, H. Schindler, Bericht der Konferenz, Wissenschaftliche Konferenz „100 Jahre Das Kapital, von Karl Marx und die dialektische Methode,“ *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 16(1968)4, s. 489-497.
- [27] Maier, H., Über die Modell-Gesetz-Relation bei der Analyse ökonomischer Wachstumsprozesse, *Wirtschaftswissenschaft*, 16(1968)2, s. 201-216.
- [28] Mende, G. u. E. Lange, *Die philosophischen Bedeutung des „Kapitals“*. Berlin 1968.
- [29] Mittelbach, H., E. Prager, F. Slawik, Bericht Arbeitskreis 2, Theoretische und praktische Probleme des ökonomischen Wachstums im Sozialismus, *Wirtschaftswissenschaft*, 15(1967)9, s. 1440-1457.
- [30] Nationalkomitee der Historiker der DDR, Die unmittelbare Wirkung des Band 1 von Karl Marxens „Kapital“ auf die deutsche Arbeiterbewegung, 『経済研究』, Vol. 18, No. 2, Apr. 1967, p. 127-134.
- [31] Ortlieb, H. -D., Korreferat, [10] s. 157-164.
- [32] Ott, A., Marx and Modern Growth Theory, *The German Economic Review*, 1967, No. 5, p. 189-195.
- [33] Reinhold, O., Die aktuelle Bedeutung für die politische Ökonomie des Sozialismus, *Wirtschaftswissenschaft*, 15(1967)6, s. 883-900.
- [34] Rennert, O., Bericht der Konferenz, „Karl Marx' Kapital—Erbe und Verpflichtung“—Konferenz der Karl-Marx-Universität Leipzig, *Wirtschaftswissenschaft*, 16(1968)2, s. 286-296.
- [35] Rosdolsky, R., Einige Bemerkungen über die Methode des Marx'schen „Kapital“ und ihre Bedeutung für die heutige Marxforschung. [10] s. 9-25.
- [36] Schliesser, W., Probleme der Warenproduktion und des Wertgesetzes im Sozialismus, *Wirtschaftswissenschaft*, 15(1967)6, s. 901-921.
- [37] Seidel, H., Vom praktischen und theoretischen Verhältnis der Menschen zur Wirklichkeit, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 14(1966)10.
- [38] Steinitz, K., Theoretische und praktische Probleme des ökonomischen Wachstums im Sozialismus *Wirtschaftswissenschaft*, 15(1967)6, s. 922-950.
- [39] Stiehler, G., Die Marxsche Analyse der Widersprüche des Kapitalismus im „Kapital“ und der staatsmonopolistischen Kapitalismus, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 15(1967)8, s. 952-961.
- [40] Stoljarow, V., Zur Marx' Auffassung vom Systemcharakter der Gesellschaft, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 16(1968)4, s. 415-426.
- [41] Ulbricht, W., *Die Bedeutung des Werkes „Das Kapital“ von Karl Marx* für die Schaffung des entwickelten gesellschaftlichen Systems des Sozialismus in der DDR und den Kampf gegen das staatsmonopolistische Herrschaftssystem in Westdeutschland. Internationale wissenschaftliche Session: 100 Jahre „Das Kapital“, Berlin, 12-13. September 1967. Berlin 1967.
- [42] Wagner, H., Bericht der Konferenz, Die vertiefung der Widersprüche des kapitalistischen Systems, die Ursachen seiner wachsenden Aggressivität und die Entwicklung der Klassenkampf des Proletariats, *Wirtschaftswissenschaft*, 15(1967)9, s. 1495-1511.
- [43] ZK der SED, „Das Kapital“ von Karl Marx und seine internationale Wirkung, Beiträge ausländischen Session „100 Jahre, Das Kapital“, veranstaltet vom ZK der SED am 12. und 13. September 1967 in Berlin. Berlin 1968.

## ソヴェト

- [1] Абалкин, Л. И.: „Капитал“ К. Маркса и политическая экономия социализма. 1967.
- [2] Абалкин, Л. И.: Проблемы мирового хозяйства в „Капитале“. „Экономические науки“ No. 8, 1967.
- [3] Афанасьев, В. Л.: „Капитал“ К. Маркса и кризис буржуазной экономики. „Вопросы экономики“ No. 7, 1967.
- [4] Выгодский, В. С.: Стиль научной работы К. Маркса. „Вопросы экономики“ No. 4, 1967.
- [5] Выгодский, В. С., Миськевич, Л.: Из предисловия 1 тома „Капитала“. „Экономические науки“ No. 8, 1967.
- [6] Выгодский, В. С.: „Капитал“ К. Маркса и экономика коммунистического общества. „Вопросы истории КПСС“ No. 9, 1967.
- [7] Выгодский, В. С.: Экономическое обоснование теории научного коммунизма в „Капитале“ К.

- Маркса. "Вопросы философии" No. 9, 1967.
- [8] Выгодский, В. С. : Очерки истории идейной борьбы вокруг "Капитала" К. Маркса—1867—1967—, 1967 (Введение)
- [9] Выгодский, В. С. : Обоснование материалистического понимания истории К. Марксом. "Вопросы истории" No. 4, 1967.
- [10] Vygodsky, V.: A Book for All Time ; Centenary of Karl Marx's "Capital". 1968.
- [11] Ефимова, В. В.: Особенности и действия закона тенденции нормы прибыли к понижению в условиях современного капитализма. "Вестник Московского университета (экономика)" No. 4, 1967.
- [12] Коган, А. М.: Теория цен в "Капитале" К. Маркса. "Вестник Московского университета (экономика)" No. 4, 1966.
- [13] Коган, А. М. : Методология исследования кредита в "Капитале" К. Маркса. "Вестник Московского университета (экономика)" No. 4, 1967.
- [14] Коган, А. М.: О творческом применении одного из положений "Капитала". "Экономические науки" No. 8, 1967.
- [15] Коган, А. М. : О неизученном плане исследований К. Маркса. "Вопросы философии" No. 9, 1967.
- [16] Коган, А. М. : Проблема различения производительного и непроизводительного труда в "Капитале". "Экономические науки" No. 5, 1968.
- [17] Коган, А. М. : "Капитал" Маркса и некоторые проблемы современных социально-экономических исследований. "Вопросы философии" No. 5, 1968.
- [18] Иванов, Н. Н. : Пять лет работы музея К. Маркса и Ф. Энгельса. "Вопросы истории КПСС" No. 7, 1967.
- [19] Из рукописи К. Маркса "Критика политической экономии". "Вопросы философии" No. 6, 7, 1967.
- [20] Ильенков, Э. В. : Проблема абстрактного и конкретного. "Вопросы философии" No. 9, 1967.
- [21] Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПСС : Из рукописного наследия К. Маркса. "Коммунист" No. 7, 1968.
- [22] Малин, В. Н., Малыш, А. И., Митронов, Н. Р., Румянцев, А. М., Федосеев, П. Н. : Маркс и современность. 1968.
- [23] Малый, И. Г. : Вопросы статистики в "Капитале" Карла Маркса. 1967.
- [24] Малый, И. Г. : Статистика в "Капитале" Карла Маркса—К столетию выхода в свет первого тома "Капитала". "Вестник статистики" No. 9, 1967.
- [25] Маркс, К. : Форма стоимости. "Вопросы философии" No. 9, 1967.
- [26] Маркс, К. : Математические рукописи. 1968.
- [27] Семенов, В. В. : Экономическая природа рабочей силы при социализме в свете учения К. Маркса. "Вестник Московского университета (экономика)" No. 4, 1967.
- [28] Солютинская, Е. : Жизненность Марксовой теории стоимости. "Экономические науки" No. 8, 1967.
- [29] Тронева, К. П. : К. Маркс о сущности и явлении экономических процессов. "Вестник Московского университета (экономика)" No. 4, 1967.
- [30] Уроева, А. : Литература о "Капитале" в СССР—1957—1967. "Экономические науки" No. 8, 1967.
- [31] Цаголов, Н. А. : Метод "Капитала" и вопросы политической экономии социализма. 1968.
- [32] Цаголов, Н. А., Киров, В. А. : "Капитал" К. Маркса и проблемы современного капитализма. 1968.
- [33] Шкредов, В. П. : К истории разработки концепции собственности в "Капитале" К. Маркса. "Вестник Московского университета (экономика)" No. 4, 1967.
- [34] 国際関係研究所訳編『世界経済と国際関係』第1集, 1968年。

#### アメリカ・イギリス

- [1] Baran, P. A. and Sweezy, P. M., *Monopoly Capital, An Essay on the American Economic and Social Order*. New York 1966.
- [2] Bronfenbrenner, M., *Das Kapital for the Modern Man, Science & Society*, Fall 1965, in [14] pp. 205-226.
- [3] Bronfenbrenner, M., Marxian Influences in "Bourgeois" Economics, *The American Economic Review*, May 1967, pp. 624-635.
- [4] Bronfenbrenner, M. and Kosai, Y., On the Marxian Capital-Consumption Ratio, *Science & Society*, Fall 1967, pp. 467-473.
- [5] Dobb, M., Introduction to an Italian Edition of Capital, in *Papers on Capitalism, Development and Planning*, London 1967, pp. 249-265.
- [6] Dobb, M., Marx's *Capital* and its Place in Economic Thought, *Science & Society*, Fall 1967, pp. 527-540.

- [7] Dobb, M., Karl Marx's "Capital", *Marxism Today*, Oct. 1967.
- [8] Erdős, P., The Application of Marx's Model of Expanded Reproduction to Trade Cycle Theory, in [10] pp. 59-71.
- [9] Erlich, A., Notes on Marxian Model of Capital Accumulation, *The American Economic Review*, May 1967, pp. 599-615.
- [10] Feinstein, C. H. (ed.), *Socialism, Capitalism and Economic Growth*, Essays presented to Maurice Dobb. Cambridge 1967.
- [11] Goldway, D., Appearance and Reality in Marx's Capital, *Science & Society*, Fall 1967, pp. 428-447.
- [12] Gordon, H. S., Das Kapital: A Centenary Appreciation—Discussion, *The American Economic Review*, May 1967, pp. 640-641.
- [13] Hodges, D., The Method of Capital, *Science & Society*, Fall 1967, pp. 505-514.
- [14] Horowitz, D. (ed.), *Marx and Modern Economics*. London 1968.
- [15] Konüs, A. A., On the Tendency for the Rate of Profit to Fall, in [10] pp. 72-83.
- [16] Lange, O., Marxian Economics and Modern Economic Theory, *The Review of Economic Studies*, June 1935, in [14] pp. 68-77.
- [17] Monthly Review, Editors Note on the Centennial of Das Kapital, *Monthly Review*, Dec. 1967, pp. 1-16.
- [18] Morris, J., Marx as a Monetary Theorist, *Science & Society*, Fall 1967, pp. 404-427.
- [19] Robinson, J., *An Essay on Marxian Economics*. London 1947.
- [20] Samuelson, P. A., Marxian Economics as Economics, *The American Economic Review*, May 1967, pp. 616-623.
- [21] Schlesinger, R., The General Law of Capital Accumulation: Past and Future, *Science & Society*, Fall 1967, pp. 515-526.
- [22] Sherman, H. J., Marx and the Business Cycle, *Science & Society*, Fall 1967, pp. 486-504.
- [23] Shoul, B., Karl Marx's Solution to Some Theoretical Problems of Classical Economics, *Science & Society*, Fall 1967, pp. 448-460.
- [24] Sweezy, P. M., Rosa Luxemburg's *The Accumulation of Capital*, *Science & Society*, Fall 1967, pp. 474-485.
- [25] Sweezy, P. M., Marx and the Proletariat, *Monthly Review*, Dec. 1967, pp. 25-42.